Peace Seeds ヒロシマの10代がまく種

木の年輪のような模様をしたドイツのお菓子「バウムクーヘン」。日本で初めて登場したのは1919年3月に今の原爆ドーム、当時の広島県物産陳列館で開かれた展覧会だといわれています。

その5年前に始まった第1次世界大戦。日本は中国でドイツと戦いました。青島にいたドイツ人たちは捕虜として日本に連れて来られ、各地の収容所で暮らしました。広島湾の似島（広島市南区）に連行された菓子職人の一人が、許されて広島の人たちに古里のバウムクーヘンを披露したのです。

似島は明治時代から戦争と関わりが深い場所です。第2次世界大戦では1945年の米国による原爆投下で傷ついた多くの人たちが運ばれ、ここで命を落としました。ジュニアライターがバウムクーヘンを通じ、戦争の影を見つめました。

＜ピース・シーズ＞
平和や命の大切さをいろんな視点から捉え、広げていく「種」が「ピース・シーズ」です。世界中に笑顔の花をたくさん咲かせるため、中学、高校生の25人が自らテーマを考え、取材し、執筆しています。

第54号　バウムクーヘンと似島

捕虜の苦労 焼いて実感

手間かけて素朴な味に

99年前、バウムクーヘンを作った菓子職人がカール・ユーハイムさん（1886～1945年）です。どんな人だったのでしょう。広島市似島臨海少年自然の家の職員、重末貴文さん（49）に教わりました。

1886年にドイツで生まれ菓子職人を目指したユーハイムさんは、20代で中国・青島に移り菓子店を開きます。妻エリーゼさんと結婚。第1次世界大戦が始まり、1人捕虜として日本に連行されました。

大阪の収容所をへて似島へ。広島県物産陳列館で1919年3月4日に始まった「似島独逸俘虜技術工芸品展覧会」では仲間に勧められ、バウムクーヘンを焼きます。「木のケーキ」を意味するこの菓子は、手間がかかる上、木の年輪が重なる見た目からお祝いの時に出されます。他にレモンケーキも出し大好評だったそうです。

当時の中国新聞は「不便な似島で、どうしてこうした精巧なものができたかと驚異の目をみはる人だかり」と報じ、さらに「菓子

99年前 ドイツ職人出品

カール・ユーハイムさん

即売所の前は場内第一の雑踏、3人の俘虜係員が目の回るほどの忙しさ」と書きます。

ユーハイムさんは収容所から解放後、エリーゼさんを呼び寄せて横浜に出店しましたが、23年の関東大震災で店が倒壊。神戸で再スタートを図りましたが、太平洋戦争中の45年6月の神戸大空襲で、また店を失います。体調も崩し、終戦前日に亡くなりました。

重末さんは「歴史に翻弄されながらもたくましく生きた人がいたからこそ、おいしいお菓子がある。似島の平和学習で子どもたちに伝え、興味を持ってほしい」と話しています。

（中1桂一葉、高2井丸貴拡）

重末さん（右から2人目）に教わり、バウムクーヘンを作るジュニアライター＝似島臨海少年自然の家
（撮影・中2田所愛彩）

当時の作り方で再現

ジュニアライターも当時の方法でバウムクーヘンを作りました。みんなで声を掛け、息を合わせないとうまく焼けません。約2時間かけ完成した時は達成感が湧きました。一口食べると甘過ぎず素朴なおいしさが広がり、戦争で苦労したユーハイムさんや、当時の人たちが喜んだ姿を思い浮かべました。作り方を紹介します。（中1桂一葉）

材料（5人分）

- 薄力粉250グラム
- 砂糖250グラム
- 無塩バター200グラム
- 卵10個
- 木炭3～6キロ

作り方

①卵黄と卵白を分ける。
②つぶした卵黄に砂糖、溶かしたバターを入れ薄力粉を3回に分けて混ぜる。
③卵白を泡立て角が立つようなメレンゲに。②と合わせペースト状にする。

卵白（左）は角が立つほど泡立て、黄身と合わせペースト状に

④木炭に火をおこし、竹筒を温める。
⑤竹筒に生地を掛けたらトントンと筒をたたき余分な生地を落とす。筒の両端を1人ずつ持って火の上にかざしながら回す。
⑥表面がきつね色になったら火から外し⑤を繰り返す。生地がなくなるまで約30～40回。強火で短時間で焼くのがポイント。柔らかくしっとりした食感に。
⑦バウムクーヘンの両端を切り落とし、竹から抜いたら出来上がり。

似島と戦争の関わり

原爆投下 1万人運ばれる

ドイツ人捕虜の収容所跡は今、似島臨海少年自然の家に（撮影・中2田所愛彩）

似島は、日本の軍事輸送の拠点だった宇品港（現広島港）と深く関わっています。

日清戦争の始まった翌年の1895年、大陸から帰る兵士の消毒、診察をするため陸軍の検疫所が建てられました。1904年からの日露戦争で第2検疫所も開かれ、その中に第1次世界大戦中に連行されたドイツ人捕虜の収容所が造られます。

45年の原爆投下で広島市内の病院が壊滅したため、臨時野戦病院となった検疫所には陸軍船舶司令部の所属部隊（暁部隊）が、けが人を運びました。5千人分あったという医薬品はわずか4日で底をつき、20日間で約1万人を受け入れましたが、生きて出られたのは2千～3千人だったそうです。

遺体は検疫所などで焼かれ、戦後、発掘調査が行われました。2004年にも85人分の遺骨が見つかり、息絶えた人の無念さが伝わります。今なお慰霊のため島を訪れる人は絶えません。

（高2中川碧）

収容所の暮らし

500人 市民と友好ムード

物産陳列館であった工芸品展覧会。捕虜だった故テオドール・エアハルト氏のアルバムから（藤井寛さん所蔵、広島市公文書館提供）

ユーハイムさんが過ごした「似島俘虜収容所」は1917年2月、旧陸軍第2検疫所の中に開設されました。ある程度自由な生活が送れたといいます。

14年に起きた第1次世界大戦で、連合国側の日本は同盟国側のドイツに宣戦布告し、ドイツの租借地だった中国・青島を攻撃。青島にいたドイツ兵や民間人が日本軍の捕虜となり、4600人以上が日本へ移されました。収容所は全国の計16カ所に造られ、似島は大阪収容所の閉鎖に伴って開設され、約500人を受け入れました。

「当時の収容所での生活は過酷だろう」と想像する人もいるかもしれません。確かに脱走を試みた捕虜もいましたが、日本は世界に認められる国になりたかったので、捕虜の扱い方を決めた「ハーグ条約」を守り彼らに寛大でした。階級によって給与も払いました。

捕虜は点呼や健康診断が義務づけられましたが、演劇や新聞発行、宮島遠足もできました。サッカーも盛んで、19年1月には広島高等師範学校（現広島大）で広島の学生合同チームと親善試合をしています。しかし、こうした友好ムードは続きませんでした。

大戦が終わり、収容所は閉鎖されます。しかしドイツと日本は、戦争への道へ進むのです。やがて広島は原爆投下を迎えます。

収容所跡地は現在、広島市似島臨海少年自然の家として、若者たちがスポーツや2度の世界大戦について平和学習をする場へ変わっています。島を訪れ、若者が再び戦争に巻き込まれないよう、まず歴史を知ることが大切だと感じました。

（高1池田杏奈）

次回は4月19日に掲載します。
ジュニアライターが取材後の感想をつづった「編集後記」を、中国新聞ヒロシマ平和メディアセンターのウェブサイト（http://www.hiroshimapeacemedia.jp/?p=81357）にアップします。